

Kyoto University

ACADEMIC GROOVE Vol. 2: BORDER

Humanities and Social Sciences

KU



人社未来発信ユニット
Unit of Kyoto Initiatives for the Humanities and Social Sciences



B O R D E R

BORDER

—— 境界、壁、分断線……。

あの境の向こうにいるのは敵か、仲間か、権力か。あるいは未知の他者なのか。
様々な壁を壊し、重たい境界を越える。それが20世紀後半以降の人類の理想であり正義であった。
しかし、かのウイルスは人の間に物理的境界を作る必要性を携え、我々のもとにやってきた。
人類にとってBORDERとは何なのか。
今こそ、我々はこの世のあらゆる境界について思考しなければならない。
その先には必ず光が見えるはずだ。

[表紙ビジュアル] 戴冠式

古来より王位継承の戴冠式は、
境界線で囲まれた領土とその上に載る権力を受け継ぐことを広く知らしめるための象徴的な儀式であった。
表紙イラストのモチーフとなったのは英国女王エリザベス2世の戴冠式。
かの戴冠式は1953年6月2日に執り行われた。

Kyoto University
ACADEMIC GROOVE Vol. 2: BORDER
Humanities and Social Sciences

Editors: 稲石奈津子、小泉都、鈴木環、佐々木結(以上、KURA)、小野英理(京都大学情報環境機構 IT企画室)
Senior editor: 清水修(ACADEMIC GROOVE MOVEMENT)
Art Director, Designer: 古田雅美、内田ゆか(opportune design inc.)
Illustrator: 岡田成生

発行：京都大学 人社未来形発信ユニット

編集・お問い合わせ：京都大学学術研究支援室(KURA)
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 学術研究支援棟 / Tel. 075-753-5161 / e-mail. jinsha@kura.kyoto-u.ac.jp

発行日：2021年2月1日

©Kyoto University

KURA

人社未来形発信ユニット
UNIT of Kyoto Universities for the Humanities and Social Sciences



<https://forms.gle/t4hUVbtg9kaPeBb68>

京都大学 ACADEMIC GROOVE Vol.2
「BORDER」の感想をお寄せください

ACADEMIC GROOVEとは、学問の現場に漂う「わくわく感」やノリ、すなわちグルーヴのこと。
「BORDER」はこのACADEMIC GROOVEを社会に伝えるために制作されました。上のQRコードもしくはURLから入れるBORDER感想フォームにて、ぜひ、読後のご感想をお寄せください。今後のACADEMIC GROOVE制作に活用させていただきます。

あなたが研究でBORDERを超えた時とは？

研究者の研究環境にも、研究者自身の心の中にも、様々な形でBORDER、境界は存在する。その境界を踏み越えた瞬間、学術はまた一步進展し、研究者は新たな境地に到達する。

他分野との協同・開眼

落合知帆(災害社会学/伝統知)

世界が無数のBORDERで埋め尽くされていて、我々は常に既にBORDERを超えているのだと気づいたとき

稲葉穂(アジア史/古代中央アジア)

そもそも、境界なんてないのかも。「ヒトと動物」という境界を取り払ったとき、新たな人間像が見えてくると思っています。

山本真也(心理学/比較認知科学)

在日韓国人2世なので、日本人でないのは当然だが純正の韓国人でもない。工学部で勉強して、いまは経済学部。仕事の上でも人生においても、Borderを超えたかどうかというよりも、常に往き来してる感じ。最近の研究テーマは、"Cross-border transportation"。

文世一(交通経済学)

英国留学中の指導教官の「私と研究すれば考えが変わるだろう」が3年後「やっぱりお前の解釈が正しかった」に変わったとき。

早瀬篤(西洋哲学史/古代ギリシア哲学)

解けない最後のパズルの鍵が、起き抜け半覚醒の脳に天啓のように舞い降りる。

西山慶彦(経済学/計量経済理論)

人との出会い。恩師・友人・学会参加者など独自の発想を持った人たちと話す時、未知の世界が見え、バラバラだったピースが繋がる。

久野愛(歴史学/経営史/文化史/感覚史)

長期の参与観察を通して、これまで当たり前だと思っていたことや固定観念が瓦解していくとき

飯田玲子(文化人類学/南アジア地域研究)

この5年間で越えたのは、国際的なボーダーと研究分野のボーダー。日本人の同僚たちと、哲学、環境学、社会学、文化心理学を結びつけて、西洋近代ではない、文化を越える新しい教育学の理論を創っている。

Jeremy RAPPLEYE(教育哲学・思想)

大方の既存研究と異なる発想を抱き、それが理論的に射っており、分析結果が予想と合致したとき

鈴木基史(国際政治経済学)

強気と弱気の「あいだ」を揺れ動くとき。ただ「越えた」という過去形では語れない。時々刻々、たたかっている。

小倉紀蔵(比較思想/東アジア)

専門分野が異なる人が集う場所に大きな魅力を感じます。なぜか。壁を作って「雑音」を遮ってしまえば効率的に研究は進むのですが、それが独創的な仕事につながらないことも予感しています。多彩な同僚に囲まれることで自分で作ってしまった壁をぶち壊せると期待しているからだと思います。

町北朋洋(労働経済学)

重田興義(アフリカ研究、民族生物学)

境界は限界ではないと気づく瞬間

稲谷龍彦(法学/刑事法)

何を閉じて、何を開くのか。それを意識しておくことにより、思い切って超えられる。

内田由紀子(文化心理学)

どうしても知りたくなったとき

見える境界線・見えざる境界線

国境線や、集落を形作る地形といった目に「見える」境界線の背後には、統治や民族、宗教、言語のような「見えない」境界もある。

多文化共生という境界のない社会を理想に抱きつつも、境界は都度崩壊し、また新たに築かれてゆくのはなぜか。

島国に生き、単一文化社会を共通の価値観としがちな我々は答えを見出せるのか。

空間を飼いならす

米家泰作（歴史地理学／東アジアの環境）

情報の輸送は瞬時に行うことができる世の中だが、生身の人間が遠方に移動するには時間も費用もかかる。つくづく人間というのは、空間的な自由が利かない、有限の存在である。だからこそ人は一つの場所を拠点として、周囲の空間に関わりを深め、自らのテリトリーとして囲い込んでいく。テリトリーが他のテリトリーと接するところには、自他の空間を分ける境界が立ち現れる。こうしたテリトリーや境界が生成するプロセスを捉えてみたいと思いながら、筆者は四国の山中を歩きまわったことがある。写真は

高知県香美市物部町の岡ノ内という山村の風景。背後の霧に隠れた山々には、縦横に大字（おおあざ。近世村落に由来）の境界が刻み込まれている。それは中世文書が示す名（みょう。荘園の構成単位）の境界に近似しており、14世紀頃に定まったものらしい。古文書にはクロヌタやアラセ谷といった小地名が、境界の目印として列記されている。個々の地名はしばしば境界争論の焦点となり、そのたびに文書が作成された。これらの地名をたどって森の中を歩くと、山野の資源を確保することに必死だっ

た時代のことが想像できる。空間的な境界は動植物や焼畑を分配する枠組みとなり、名を単位とする山村社会の秩序を支えたことだろう。しかしそれと同時に、自他の区別が無い、ありのままの空間は失われ、社会にとっては境界を維持することが目的化していく。現代の私たちが生きる空間は、テリトリーと境界で満ちあふれている。それは、空間的には有限の存在である人間が、空間を自身のテリトリーとして飼い慣らし、社会を秩序づけようと努めてきた結果である。

岡ノ内の山村の風景（高知県香美市物部町）



「われわれ」と「やつら」

中溝和弥（比較政治学／インド政治）

私が研究しているインドでは、ムスリムなど宗教の少数派への迫害が顕著になっている。多数派であるヒンドゥー教徒は雌牛を崇拝するため、雌牛保護団なる自警団が結成され、牛の屠畜業者を襲撃する事件が頻発している。果ては「牛肉を持っている」という噂だけでムスリムを殺害した事件も起こった。なぜか。何がヒンドゥーとムスリムを分けるのか。

信じる宗教の違いといえばそれまでであるが、話はそう単純ではない。インドのムスリムの多くはヒ

ンドゥーからの改宗者であり、イギリス植民地統治以前は両宗教の境界は曖昧だった。確かに外見は異なるが、装いの違いが大きい。ヒンドゥーの服装をしたムスリムがヒンドゥーと間違えられる話は調査でも耳にし、宗教暴動の際にヒンドゥーの衣装（サリー）を着ていたため難を逃れたムスリム女性の証言もある。インド映画『PK』は、宗教的帰属の認識が装いに左右されることをコミカルに描いている。

このように曖昧な宗教の境界が、時として生死

を分けるほど明瞭になる。なぜか。難しい問いだが、決め手は政治だと考えている。「われわれ（ヒンドゥー）」と「やつら（ムスリム）」という二分法に基づいて敵を作り出し、支持を調達する政治手法は、インドのみならず世界各地で見られる。しかし、インド独立運動を率いたM.K.ガーンディーが二分法を明確に否定して運動を成功させたように、歴史は二分法を克服できることを示している。現在の状況でどのように克服するのか、その道を示すことが私たちの課題である。

インド・ビハール州の農村



文字が壊す境界・生み出す境界

トビリシ大学(1918年創設)の校章

伊藤順二(コーカサス近代史)

黒海のほとり、ロシアとトルコに挟まれたジョージア(グルジア)という国の知名度は低い。日本では料理のシュクメルリが最近バズったぐらいだろうか。2018年は第一次世界大戦終戦100周年、つまりロシア革命101周年であり、スターリンの故郷でもあるジョージアは建国100周年を盛大に祝っている。

19世紀のロシア領ジョージア住民の多くは正教徒だったが、1878年にロシア領となったアチャラ地方には「ジョージア語を話すムスリム」も多数存在した。正教徒知識人たちは彼らを「異教徒の兄弟」

と見なし、アラビア文字に慣れていた彼らにジョージア文字による世俗教育を試みている。この文字は紀元前3世紀、統一王国を建国したバルナヴァズ1世が制定したという伝説があり、19世紀の教科書ではこれが「史実」だった。実は考古学的には、この文字はキリスト教を受容したジョージアで聖書翻訳のため5世紀頃に作られたという説が主流だ。しかし伝説の上で文字を宗教から切り離すことで、ジョージア文字は宗教的境界を崩す力となった。アチャラ地方は現在もジョージアの一部である。

しかし、言語ナショナリズムは異言語話者への抑圧ともなりえる。2018年は南オセチア紛争10周年でもある。ジョージアに住むオセチ人の多くは正教徒だが、言語的には別言語を話し、文字や言語の強制に対する文化的不満は古くから存在した。ロシアが支援する紛争の結果、南オセチアは「独立国」となった。言語と宗教には、境界を作る作用、境界を越える作用の両方がある。境界の存在=差異を認めつつそれを越える作業はいつでも一筋縄ではない。



境界線をもたない生き方 —— 複数を志向するロマの世界

I DON'T HAVE BORDERS TO PROTECT (Sead Kazanxhiu, Autostrada Biennale (photo by: Tughan Anit) 2017, Prizren)

岩谷彩子(文化人類学/「ジブシー」・ロマ研究)

「放浪の民」「ジブシー」と呼ばれてきたロマ(Roma)は、ヨーロッパ最大規模の国家をもたないエスニック・マイノリティである。言語学的な特徴から、インドから遅くとも9世紀頃までに異なる時期・経路で世界に離散したとされるロマであるが、彼ら自身には「出立の地」をめぐる記憶はない。彼らを結びつけているのは単一の土地や宗教ではなく、家族を中心とした仲間に対する愛着や想像上の「ジブシーらしさ」である。私が出会った、イスタンブルでロマたちが集うチャイハネ(カフェ)を経営

するロマ男性は言う。「ロマには植民地主義も戦争もない。争いの種となる組織的な宗教もない」。彼自身、13歳まで敬虔なイスラム教徒で、学生時代は無神論者、48歳となった現在はキリスト教徒である。自分たちの国をもたない彼らだが、それぞれが居住する国家の戦争に常に巻き込まれてきた。第二次世界大戦中のナチスによる強制収容所での虐殺をはじめ、移動する先々で真っ先に境界をめぐる戦争に駆り出されてきたのは、社会の辺境で暮らしてきたロマたちであった。アルバニア人ロマのアーティ

スト、シード・カザンジウ(Sead Kazanxhiu)は、戦地に送られないように子供を隠したという彼の祖父の言葉「私には守るべき境界はない(I don't have borders to protect)」を金色の風船としてコンボの町に掲げ、観客がこの言葉を各自の言葉で繰り返すインスタレーションを行った。ロマの言語であるロマニ語には「境界」に相当する言葉はない。声をひとつにまとめるのではなく、複数の声を響かせることの重要性を、身を潜めながら複数の境界をかいくぐり生きてきたロマは教えてくれる。



COVID-19が描き出すBORDERの光景

2020年、突如として世界を危機に陥れた新型コロナウイルスは、我々に様々なBORDERを再認識させた。今までの社会システムや生活の在り方が大きく揺れ動く中、潜在的な問題がコロナによって表面化し、先鋭化してきている。Withコロナのこの時代に2つの領域の間で揺れ動く価値観、その境界をどう捉えるか――。

2020年7月から8月に実施された人社未来形発信ユニットのオンライン集中講義「立ち止まって、考える」の4つのテーマから、今後の世界を考えるヒントを探る。

出口康夫
(分析アジア哲学)

自己と他者のBORDER

自己とは一人称単数の「私」。そしてこの個人的自己と他者の間には越えられない一線Borderが横たわっている。また本来はバラバラの「私」や他者が時たま集まることで「我々」が生まれる。「我々」は「私」にとって、いわば着脱可能な衣装なのであり、すべての服を剥ぎ取れば、その下から「裸の私」が姿を現すのである。さらに自己とは人生を生きるエージェント（主体）でもある。すると自己が単独者である限り、人生とはつまるところ一人で歩む行路となる。

このような考えに僕は長年捉われてきた。だが自己を「私」ではなく、一人称複数「我々」ととればどうなるか。この「我々」としての自己には、その一員として「私」や他者が含まれている。「私」と他者は「我々」を共に構成する仲間同士なのである。それでも「私」と他者は互いに別個の存在であり続ける。ここでもやはり「私」と他者の間にはBorderが残っているのである。

一方、人生の主体はもはや「私」ではなく「我々」となる。「私」は生きている限り、つ

ねに「我々」の一員なのであり、仲間である他者とともにある。「私」にとって、「我々」や他者はもはや着脱可能な衣装ではなく、そこから逃れることができない「不可逃脱的」な存在と化するのである。「私」はつねに仲間とともに行為をし、生きている。他者は「私」の人生の不可逃脱的なパートナーなのであり、「私」はもはや「裸の私」としては存在しない、いやむしろ存在しえないのである。

この場合、「私」と他者との間になお横たわっているBorderは、もはや自己の内と外とを決定的に隔てる壁ではない。それは人生の主体である「我々としての自己」の内部を横切る中仕切にすぎないのである。

この夏のオンライン講義では、このような話をした。それに対して「この講義も我々ですね」というコメントを即座にくれた方もいた。そう、講義をするのも「私」ではなく「我々」だ。僕自身も改めてそう感じられたコロナ禍の夏だった。

瀬戸口明久
(科学史)

自然と人間のBORDER

天災か人災かという問いがある。3.11の直後には原発事故について何度も問われたし、今回のCOVID-19の流行においても投げかけられた問いである。だがこのような問いは、自然と人間の世界が明確に分けられるとする発想にもとづいている。この見方によれば、天災とは外部の自然から人間への来襲であり、人災とは人間が制御できるはずだったのに失敗してしまった災害である。

だがそもそも災害とは、人間の世界があつてはじめて生じるものである。かつて寺田寅彦は、文明が進めば進むほど災害は大きくなると述べた。人間は重力に逆らって高層の建築をつくりあげ、河川を堤防で囲って征服したつもりになっている。だがいったん地震に見舞われると建築物は人間を押しつぶし、堤防は崩れるとむしろ深刻な水害を引き起こす。そしてヒトのなかで増殖する細菌やウイルスは、人間の集団が大きくなればなるほど広がりやすく、強毒化する可能性が高くなっていく。COVID-19は、グローバルな規模で人間が移動することによって、生まれるべくして生まれた感染症なのである。

それに加えて現代社会は、あらゆる環境を精緻にモニタリングする体制を整備している。大気はつねにリアルタイムで監視され、気象災害は事前に予測されている。地震でさえ、第一波をとらえて直前に警告するシステムが確立している。感染症のデータも19世紀末には詳細な統計として集約されるようになった。さらにCOVID-19において新しいのは、データをもとにシミュレーションし、未来の流行が事前に予測されるようになったことである。現代において災害とは、もはや外部の自然から突然やってくるものではない。それは実際に起こる前に、科学技術を介して人間の世界へ投げ込まれるものなのである。

科学技術が発達した現代社会においては、自然の世界と人間の世界は重なり合っている。そこではさまざまな新しい災害が、次から次へとやってくる。それは最初は驚きをもって受け止められる。だがそれがモニタリングと予測のシステムに組み込まれたとき、一人一人にとっての「禍（わざわい）」は科学技術社会の日常的ななかに埋め込まれていくのである。

児玉 聡
(倫理学)

自由と規制のBORDER

2020年1月下旬に武漢での都市封鎖が起き、2月上旬に横浜港でダイヤモンド・プリンセス号乗客の船内待機指示が出された。当時はまだ、新型コロナウイルス感染症は多くの国では対岸の火事として受け止められていた。世界中の人がその深刻さに気付いたのは、2月下旬からイタリアで始まった小規模なロックダウン（都市封鎖）が拡大し、ついにはそれがイタリア全土、そして日本を含む世界各地に広がった頃だろう。

感染症対策のために、個人の移動や渡航の自由はおろか、営業の自由までがこれほど大きく制限されるとは、多くの人は想像していなかったのではないだろうか。不要不急の催しの中止や延期の要請によって、劇場や会議場などでの表現の自由や集会の自由までもが間接的に制約されることになった。健康と生命を守るために、個人の自由をどこまで制限することが許されるのか。これが私の専門とする倫理学の問いである。

原則として他人に危害を加えない限り各人は自由に行動してよいというのが自由主

義の考え方だ。この原則を奉じる国々において、なぜこのようなロックダウンが許されるのか。私のオンライン講義（パンデミックと倫理学）では、こうした感染症対策による個人の自由の規制がどこまで正当化できるのかという問題を中心に議論を行った。全体の利益のために個人の自由が制約されることは、限りある人工呼吸器の配分や、ワクチンの優先接種の順位付けのような状況でも考えなければならない問題だ。個人の自由の限界についてどこで線を引くべきか、十分に議論がなされる必要がある。

YouTubeライブという、私にとっては新しい媒体上での試みであったが、思いのほか大勢の受講生がリアルタイムで受講してくれたので、ときどき酸欠になりつつも楽しく講義をすることができた。今回のオンライン講義が大学と一般社会の間にある垣根を下げる一助を果たしたとすれば、望外の喜びである。

山本博之
(地域研究・メディア学)

現実と虚構のBORDER

テレビ広告と映画で世界的に知られるマレーシアのヤスミン・アフマドは、常識を逆転させた映像によって視聴者を立ち止まって考えさせるような遊び心に溢れた映画監督だった。コロナ禍の今、彼女が生きていたらどのような映像を見せてくれたらだろうか。

新型コロナウイルス感染症によって私たちの行動と意識が大きく変わった「コロナ後」の現在、他人との身体的な接触が激減する一方で、オンラインの情報のやり取りが激増している。Web会議が瞬間に普及し、物理的距離や国境を越えた不特定多数の相手との映像のやり取りも容易になっている。個人による発信が普及したことで、編集済みの公的な情報だけでなく、画面に映りこむことで発信者の私的な顔も伝えられる。また、映像に閲覧者のコメントが添えられることで、個人的な感想が公共性を持つ情報になる。コロナ後の映像メディアでは、公的な情報と私的な情報、そして事実と虚構の境界の融解が急速に進んでいる。

災いは社会の潜在的な問題を露呈する。コロナ禍も、以前の状態に戻すだけでなく、コロナ禍

によって露呈した社会や個人の問題に手当てしてよりよい社会を作る機会と捉えたい。そのためには、コロナ禍が収まってからではなく、今こそ立ち止まって考えることが肝心である。コロナ後の世界では、人の属性に基づく排斥が正当化されて排他的なナショナリズムが強まることが危惧されている。オンラインでの映像のやり取りの増加はこの問題にどのように働くだろうか。

ヤスミンは、『細い目』から遺作の『タレントタイム』までの長編映画で、そして『葬儀』などのテレビ広告で、性別・民族・宗教による区別や役割についての常識を逆転させた映像作品を作り続けた。現実とは違うけれどそんな現実があってもいいと思わせる物語を映像で見せることは、虚構を現実に浸透させていき、現実を変える力を持つ。

映像は複層的なメッセージを持ちうる。多くの人に伝わりやすいメッセージだけでなく、わかる人にだけ伝えようとするメッセージもあれば、作り手が意識せずに伝わってしまうメッセージもある。読み解きを意識して映像作品を楽しみながら、虚構の理想を現実の世界でも実現させようではないか。

思索と記述。研究者と研究ノートの境界

研究においては、思索も、フィールドワークで目撃した光景も、実験や観察の記録も、研究ノートに記述され、形として残される。時には、研究者の頭の外に出た記述をもとに他の研究者との対話（越境）が行われる。

CASE 1

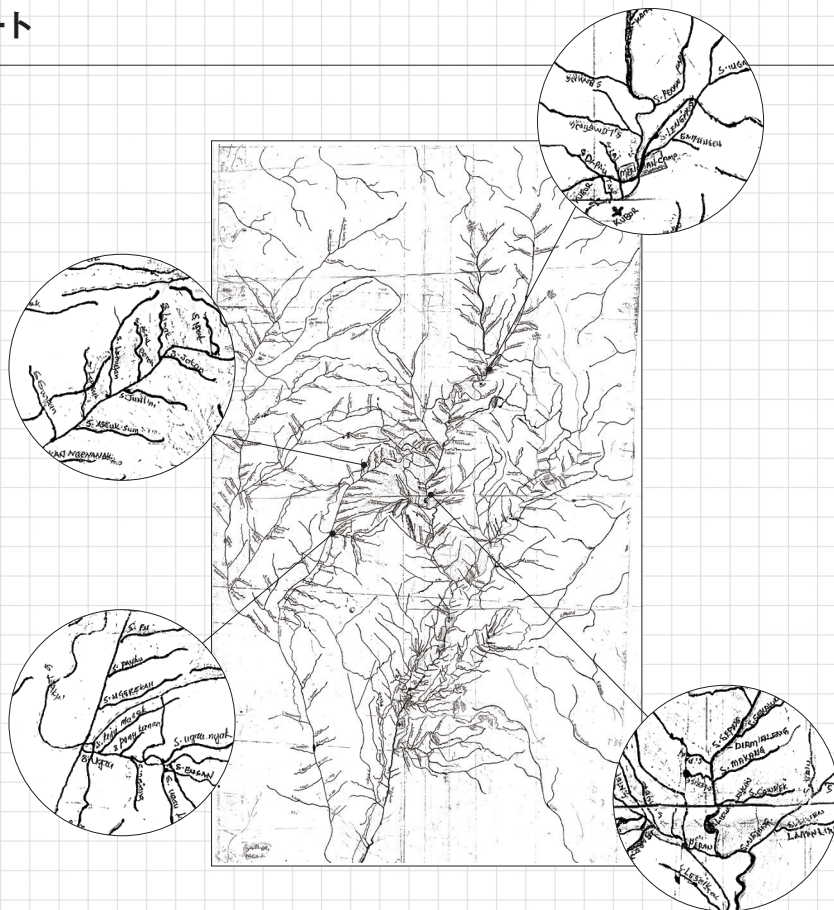
ボルネオ島のフィールドノート

石川登（文化人類学 / 東南アジア地域研究）

ランドスケープを 記憶する

農民は土地を拓き、ランドスケープに自らの歴史を刻印する。東南アジア、ボルネオ島の採集狩猟民は永らく深い森を遊動して生きてきたため、自らの土地に対する権利が否定され、森は木材伐採やプランテーション開発により破壊されている。熱帯雨林が生存基盤であり、そこで人々が代々生きてきたことを証明する手立てとして、文化人類学者は地図を作り、彼／女らが自らの言葉で呼ぶ川の名前と語られる物語をひとつひとつ記録する。

ボルネオ島での調査中に共同研究者や現地の住民とともに作成した地図。現地語で川名を記している。
原版約80 cm×132 cm。



CASE 2

西平直のノートと研究者の共鳴

西平直（哲学） 野村理朗（実験心理学）

あるシンポジウムにて記述された西平のノートをめぐり、西平・野村の対話が始まった。

先端技術と伝統の架橋に向けて

かつて疫病が蔓延するなか、人々は自然を詠み、詠いときに舞った。私はこのシンポジウムを企画主催しました。この曖昧さと不確実性の増しゆく状況は、先端技術の活用とともに、伝統の意味と力をあらためて問うものである。そう考え、俳句とAIとの関わりから未来を描きゆくことを目的としました。開催はオンラインで、対面での聴衆との丁々発止はないものの、画面に映し出された映像はシンプル、だからこそ登壇者にフォーカスし、その精妙な息遣いの覚知と表現が議論を一層豊かにします。そうして西平先生の急所を突く問いが、未来への示唆となるさらなる展開を生みました。このノートはその記録です。（野村理朗）

無心の心理学 2020.8.16
西平

無心とAI. 視覚化.
AIの心. AIの心. AIの心.

AI作品に自己意識
創作過程.
多岐多岐
「美」の審美性. 魅力
AIの理解. 鮮明性. vividness
AIの理解. 鮮明性. vividness

「美」の審美性. 魅力
AIの理解. 鮮明性. vividness
AIの理解. 鮮明性. vividness

Classic HAIKU Lowenstein 2013
「無心」の心理学

自己意識とvividness
「美」の審美性. 魅力
Small self と 豊穡な AI
大奇観. AIは自己意識.

無心とAI
「美」の審美性. 魅力
AIの理解. 鮮明性. vividness

自己意識
名詞の定義?

AIの心. AIの心. AIの心.
AIの心. AIの心. AIの心.

AIの心. AIの心. AIの心.
AIの心. AIの心. AIの心.

AIの心. AIの心. AIの心.
AIの心. AIの心. AIの心.

AIの心. AIの心. AIの心.
AIの心. AIの心. AIの心.

AIの心. AIの心. AIの心.
AIの心. AIの心. AIの心.

AIと人間との分水嶺はなにか。AIに任せられることは任せろえて、私たちがオフラインで守るべきものは何か。新たな気づきが得られました。その自覚のもと、AIと人間の協業の可能性が広がります。(野村)

AIは選に漏れたものから学べない。学習データとして与えられないと学ぶことができない。新鮮でした。ならば、それを掬いあげる眼を人間が持つかどうか。消えていったもの、現れなかったもの。そうしたものを私達がAIに伝えることができるかどうか。(西平)

すぐに消えてしまいます。思いついたアイデアを忘れてしまうほど悔しいことはない。だから書けるものなら何でも掴んで書くんです。「その見えた光、未だ消えざるうちに、いい留むべし」です。(西平)

[赤や青でマークされた部分について] 大切だと感じた部分。ここに研究領域を超えた共鳴、クロスオーバーがみとれます。また、心理学のタームや道具立てのメモもあります。その前提条件はかならずしも「あたりまえ」ではないこと。ここに意味を解体し、問い直すきっかけが生まれます。(野村)

オンラインシンポジウム「無心の心理学3—AIは舞い、作句の夢をみるのか—」(2020年8月16日)の記録。西平はコメントーターとして参加。左は講義内容のメモ、右は議論や考えたことのメモ。原版A4。
※<https://www.jpaa2020toyo.com/symposium>

CASE 3

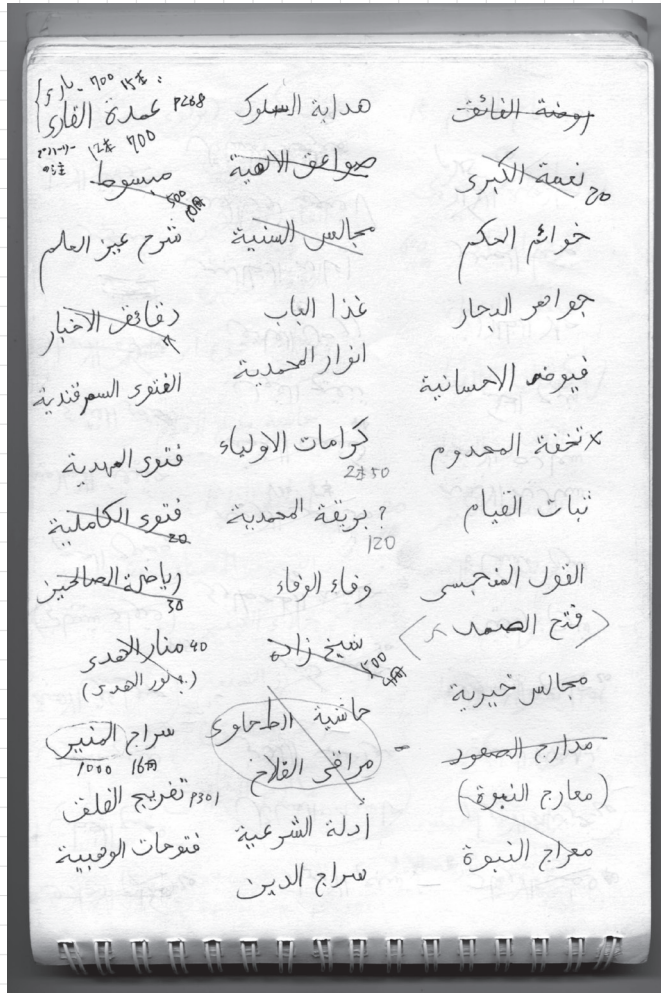
中国ムスリムのアラビア語文献リスト

中西 竜也 (歴史学 / 中国ムスリム研究)

中国で アラビア語文献を 探す

中国ムスリムは、19世紀以後、それまで比較的疎遠であった西・南アジアのムスリムたちと関係を結び直し、新たなイスラーム文献に接するようになりました。これらの文献からどんな思想展開が中国ムスリムのあいだで生じたのか。この問題を吟味する出発点として10年ほど前に、20世紀のある中国ムスリムの著作に引かれる参考文献を拾って作成したのが、このリストです。中国での現地調査を通じて、現在も実際に流布していることを確認したものにチェックをつけています。

20世紀の中国ムスリム(漢語を話すムスリム)のあいだに流布していたアラビア語イスラーム文献を調査するために、作成したリストの一部。原版14.5 cm×21 cm。



境界・越境を考えるための 映像作品ガイド

大地

原題：The Good Earth /
1937年 / シドニー・フランクリン 監督

1937年、欧米では、アジアを舞台とした2つの映画が封切り上映された。ひとつは、1月にロサンゼルスで公開された、パール・S・バック原作『大地 (The Good Earth)』で、大ヒットした。その年の夏に盧溝橋事変や上海事変を契機に日中全面戦争が勃発したこともあり、翌年のアカデミー賞の主演女優賞、撮影賞を獲得したほか、作品賞、監督賞、編集賞にもノミネートされた。もうひとつは、3月23日にベルリンで公開された、日独初の合作映画『新しき土 (Die Tochter des Samurai: 侍の娘)』である。こちらは、大ヒットには遠く及ばなかった。いずれも、戦争に傾斜したプロパガンダ色を内包した劇映画であった。地域イメージが越境するなかで変容するという、アジア・イメージのグローバル化の一断面を伝えている。

貴志彦彦(20世紀史 / 東アジア地域研究)

発売元:ワーナー・ブラザーズ ホームエンターテイメント /
販売元:NBC ユニバーサル・エンターテイメント / ¥1,429 円 + 税 (DVD 特別版) © 2011 Warner Bros. Entertainment Inc. All rights reserved.



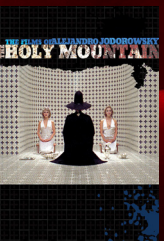
ホーリー・マウンテン

原題：The Holy Mountain /
1973年 / アレハンドロ・ホドロフスキー 監督

眼前にある一つの線、あるいは地の裂け目が境界と見える者の意識は、すでに境界の向こう側に存する。とはいえ、境界の彼岸が此岸を越えた超越的な世界であることは得てして無く、此岸同様の別の村の日常に辿り着いたに過ぎないことに失望することがしばしばである。それでは、あの高い山の頂点を目指さねばならない。この映画は、黄金と不死を求め、畏れられる聖山の頂を目指す盗賊・錬金術師・兵器商人・大統領財務顧問・売笑婦等の冒険と修行の旅をエキセントリックに描いた。衝撃のラストは、夢オチでなく現実オチ。境界は自己の外側でなく内側にあることを言っているようにも見える。毀譽褒貶の激しい作品であるが、ニューエイジのはしりであり、ジョン・レノンが製作を支援したことからはすると、後期レノンの琴線に触れる要素もあったのであろう。

坂出健(国際政治経済学)

Image from Alejandro Jodorowsky's El Topo © ABKCO Films a division of ABKCO Music & Records, Inc. <https://www.abkco.com/store/the-holy-mountain/>



映像は我々に境界の重みを、そして越境の大切さを教えてくれる。

ここでは、BORDERを考えるために大切な8本の映像作品を紹介しよう。

観てみればわかる。「境界」の向こうにある世界が。

Film Crosses the Border.

自転車泥棒

原題：Ladri di Biciclette /
英題：Bicycle Thieves /
1948年 / ヴィットリオ・デ・シーカ 監督



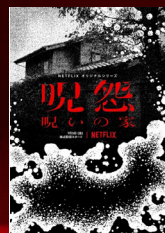
映画『自転車泥棒』は、仕事用自転車を盗まれた父親の物語。ローマの街を探し回り、疲れた拳句、他人の自転車を拝借する。見詰めた群衆に囲まれ、「犯行」を見ぬよう遠ざけた息子が戻ってくる。被害者が不問に付すことにし、解放される父子。原題は泥棒を複数形で表現するが、主人公は泥棒か。最初に主人公が盗まれた際の複数犯を示唆するか。人が「犯罪者」と認定される境界線はどこに引かれるだろう。逃走を助け、自転車を隠し、盗人を守ろうとするのは共犯かもしれない。許されたとはいえ、持ち去った時点で主人公は罪を負うべきか。映画では橋が何度か登場する。川向うとこちらとを隔てつつ結び付ける象徴。闇社会に転落する寸前、息子に「救出」された父は、炬を躓えず…。
佐々木健(ローマ法)

自転車泥棒の一場面: [https://it.wikipedia.org/wiki/File:Ladri_di_biciclette_\(film\).jpg](https://it.wikipedia.org/wiki/File:Ladri_di_biciclette_(film).jpg)

呪怨—呪いの家

2020年 / 三宅唱 監督

多くの芸術作品は字義的であれ象徴的であれ何らかの「境界」一人と人、あるいは「芸術」そのものなどを扱っている。しかし、ここは字義的に、異界との境界を主題とする特権的なジャンルとしてホラーに着目しよう。三宅唱監督のNetflix作品『呪怨—呪いの家』(2020)は、脚本家・高橋洋(「リング」シリーズなど)が長年拘泥してきた二階/屋根裏の怪の進化形である。シェアハウスの屋根裏が境界となる先駆的作品として、1974年の『暗闇にベルが鳴る』(ボブ・クラーク監督)を挙げたい。心霊スポットという名の境界を扱った清水崇監督『犬鳴村』(2020)が話題になったが、影響を与えたと言われる伊藤俊也監督『犬神の悪霊(たたり)』(1977)は、差別を生む「境界」に対するより聡明かつ過激なアプローチを見せている。
木下千花(映画研究/日本映画史)



配信:Netflix

College of Wizardry

—A Short Film(魔法大学—短編フィルム)
2014年 /
Cosmic Joke Ltd(コスミックジョーク社)制作



デンマークの主催者がポーランドの城で開催する英語によるライブ・アクション・ロールプレイ(LARP)、「College of Wizardry」(魔法大学)。ミュージック・ビデオで有名なイギリスの映画会社がこの革命的ロールプレイングの大ヒットイベントをドキュメンタリーにした。3日間のイベントでは、参加者が日常的な現実から幻想的な魔法の世界へとクロスオーバーし、魔法使いになりきって遊んだり、魔法薬学の試験の勉強をしたり、魔法の杖の使い方を教えたり、城の幽霊のお使いで秘密の扉をこっそりと破ったりする。コスプレ、即興演劇、ゲームが組合わさったLARPには、世界中に多くのローカルな文化が存在している。その多様な背景をもつ人々を集めた魔法大学は、国境と日常という現実の壁を越えるLARP国際時代の発祥の地である。
Björn-Ole KAMM(日本文化学、メディア学/文化越境研究)
参考URL: <https://witchards.com/classic/> (2014-18 Dziobak社、2019年からはThe company P社) <https://www.cosmicjoke.co.uk/college-of-wizardry-short-film/>

アクト・オブ・キリング

原題:The Act of Killing /
2012年 / ジョシュア・オッペンハイマー 監督

今からおよそ50年前の冷戦期。インドネシアで反共の名の下に50万人~100万人の市民が殺された。虐殺の実行者たちは正義を行ったとして英雄視され、その行為は責められることなく今日に至る。同じ社会に被害者と加害者がいて両者の溝が埋められないまま半世紀が過ぎた頃、米国人監督が当時の様子を再現する映画の制作を実行者に持ち掛け、制作過程を撮影することで虐殺の真実を究明し、実行者の心の葛藤を引き出そうとする。実行者が殺害の様子を嬉々として再現する衝撃的な映像は話題を呼び、数々の賞を受賞した。映画の終盤で実行者は悪夢に苦しむ。映画好きで米国映画を真似て殺害を行ったと語る実行者がカメラの前で見せる苦悶の姿は、はたして真実の行為(アクト)か、それとも演技(アクト)なのか。この作品は誰を告発し誰を救済するために作られたのかを見る者に問う。
西芳実(インドネシア地域研究)

発売元:バップ /
¥3,800+税(DVD)、
¥4,800+税(Blu-ray) © Final Cut for Real Aps, Piraya Film AS and Novaya Zemlya LTD, 2012



バグダッド・カフェ

原題: Out of Rosenheim /
英題: Bagdad Café /
1987年 / パーシー・アドロン 監督

アメリカ南西部の砂漠にボツンと存在するカフェに、トランクを引きずりながらひとりの中年女性がやってくる。ドイツの民族衣装を持った彼女とカフェの黒人女主人はいかにもそりが合わないし、そこに集まっている宿泊客もみんな少しずつ風変わりであり互いに距離をとっている。それがちょっとしたさきかけから交流が生まれ、少しずつ距離が縮まったり響き合うものを感じつつ、またそれぞれの方向に去っていく。ある国から他国へと国境を移動する途中で一時的に時間を共有する空港のトランジット・ラウンジでの出会いと別れ、移動と越境が日常化する社会のイメージが重なる映画である。遠いところから聴こえてくるような主題歌Calling Youも耳に残る。越境のファンタジーともいえるような作品。
稲垣泰子(教育社会学/教育文化論、教養論)

発売元:WOWOW
プラス / 販売元:
紀伊國屋書店 /
¥4,800+税(DVD)、
¥5,800+税(Blu-ray)



太陽の男たち

原題: Al-Makhdu'un /
英題: The Dupes /
1973年 / タウフイーグ・サーレフ 監督



クウェイトを目指す3人のパレスチナ難民がいる。彼らは給水トラックのタンクに身を潜め、イラク・クウェイト国境の越境を試みるが、車は灼熱の砂漠に放置され、タンクは焦熱地獄と化する。救いを求めタンクの壁を叩く3人の叫びは、安逸を貪る世界には届かない。世界の忘却の中で絶命するしかないパレスチナ難民の実存を壮絶なイメージで形象化したガッサーン・カナファニーの小説「太陽の男たち」を、エジプト人監督T・サーレフが映画化した。やがてパレスチナ人は、世界の恩情にすぎない難民であることをやめ、世界の喉元に銃を突きつけ、ハイジャックした飛行機で国境線を越える解放戦士に変容を遂げ、歴史の舞台に立ち現れることになる。
岡真理(現代アラブ文学/思想としてのパレスチナ)

販売元:Arab Film Distribution

大学の役割の一つとして社会貢献がしばしば挙げられるようになり、大学から一般の方への情報発信も増えてきた。これはもちろんよいことではあるのだが、少し気をつけるべき面もあるように思われる。

たとえば脳神経科学に「賦活」という用語がある。よく行われるfMRIを使った実験などで「賦活」という場合、脳のある部位の血流量が増えたという意味でしかない。しかし、「脳が賦活した」と聞いたらその部位の働きが永続的に良くなった、というような意味にうけとる人もかなりいるのではないだろうか。

似たような「誤解」は最近の新型コロナウイルスをめぐる情報発信についてもみられたように思う。

このウィルスの感染のモデルや治療薬などについてさまざまな研究成果が公表されてきた。予備知識のある人が見れば予備的な段階の研究だとわかるものでも、SNSなどで大きく取り上げられ、まるで確実な情報であるかのように話題となっていた。

この2つの事例に限らず、その分野の専門家同士で議論している限りにおいては問題なく理解できることでも、専門外の人々の目に不用意に触れたときに誤解を誘うことがありえ、悪影響を及ぼすかもしれない。オープンな情報交換のいいところは保持しつつ、同時に、予備知識がない人が見たときに誤解しそうな情報については、一定の障壁を設けるなどのやり方を考える必要があるかもしれない。

ボーダレス時代の大学を見据えて

従来から大学は社会とのインタラクションを強く意識してきた。

しかし、今、新型コロナウイルス対策によるオンライン化などによって

その形態すら変化しようとしている。

ボーダレス化する大学において、研究は、そして教育は、どのように継承されていくのか。

知のボーダレス化と閉鎖性

大学における知の生産のボーダレス化、新型コロナウイルスにより国境が閉鎖された今も進行中である。例えば、国際学会誌の編集。わたしの場合、マンチェスター、ブリスベン、メルボルン、ブルーミントン、エディンバラにいる研究者と共同で学会誌を二つ編集している。彼ら・彼女らとは日常的にメールでやり取りし、定期的にZOOM経由で意見交換を行う。また、世界中から送られてくるおびただしい数の論文に目を通し、査読者を世界の研究者から選びだすのも私たちの仕事であり、出来るだけ多様な国や地域の研究者に協力を依頼する。出版社自体は、イギリスとアメリカに本社を置く

が、原稿の校正作業に関しては、比較的労働力の安いインドやフィリピンにて行われ、編集サポートの方もブリスベンとヨハネスバーグに在住する。ネット接続一つあれば、ボーダレスな知の生産に関与することができ、しかも、それは個人の研究室、または大学界隈の喫茶店という、何気ないところで行われる。

だが、ボーダレス化する知の生産にも、境界は確実に存在する。まずは、英語という障壁。高度に英語が使えないと国際的知の生産に関与することは難しい。編集者のほとんどは英語圏で生まれ育った者か、または私のように英語圏で研究者の訓練を受けた者である。英

語圏の研究手法や論争に関連付けて研究成果を提示しないと、「正当な研究」として受け入れられないことも多々ある。多くの投稿論文に目を通さなければならない編集者が、一つの原稿に割く時間は限られており、最初の5ページ程度を読んだ段階で、査読にすかどうかを「直感的」に判断する。この「フィット感」を左右するのが、編集者が長年慣れ親しんできた研究手法や言説であり、多くの場合、それは英語圏のものである。よって論文を採択されるには、高度な英語を習得するのみならず、英語圏の議論を踏まえて、そこで好まれる研究手法や認識の前提をある程度受け入れる必要がある。とり

わけ、国際的に統一された研究言説空間が確立していない人文科学系においては、この問題は深刻である。各国の教育伝統や制度的特徴を反映した形で研究文化が形成されてきた教育学も然りである。最後に、学術誌が商業ベースの出版社により管理されていることも、大きな障壁として指摘したい。公的支援を受けた研究活動の成果として論文が出版されるわけだが、法外な購読料を払わなければ、研究成果にアクセスできない場合が多い。わたしが編集している二つの学会誌も然りである。ボーダレス化と閉鎖性が共存する学術知の生産、様々な矛盾を抱えつつ日々進行中である。

無形の境界と ブリッジ人材

LIU, Ting

(グローバル人材マネジメント)

多国籍企業 (MNC) は、地理的、文化的、言語的境界によって特徴付けられる。そこで活躍する、複数の文化や言語を内在化して一体化するブリッジ人材 (Bridge individuals) が、グローバル人材マネジメントや国際的なモビリティ研究の分野で今注目されている。

国際人的資源管理は、過去数十年でボーダレスになっている。しかし、COVID-19の影響によって境界線は再び実体化している。COVID-19は、多国籍企業が地理的な境界を越えたグローバル人材マネジメントをどのように行うか、再考を迫っている。ポストコロナ

の世界では、地理的な境界を完全に越えることはできないが、無形の境界をまたぐことはできる。この境界をまたぐキーパーソンがブリッジ人材である。彼らは、特定の文化的および言語的スキルを持ち、グローバルバーチャルチームにおいて知識伝達ノードの役割を果たす、海外駐在員、逆駐在員、または非ネイティブ現地採用などである。

グローバルなバーチャルチーム内で境界のないコミュニケーションと効果的な協働を確立するために、ブリッジ人材は、情報の交換、ネットワークのリンク、異文化間コミュニケーションの促進、ユニット間の境界の

越境、グローバルな不確実性との対立のコントロールにおいて、橋渡しの役割を果たす。国際的な任務は、それまでの形から変わるだろう。在宅駐在員、バーチャル駐在、バーチャル国際赴任など新しいタイプの国際人材異動が、将来のトレンドでは期待されている。

ブリッジ人材を生み出す大学は、ブリッジ人材の才能開発において重要な役割を果たしている。そこでは、専門知識だけでなく、語学力、異文化知性、グローバルマインドも求められる。産学の連携により、大学は国境内の境目のない世界の要件を満たすためのブリッジ人材を育成する中心となるだろう。

遙かなる学術の継承の変遷

Andrey KLEBANOV (サンスクリット文献学)

私は文献学者で、専門分野はインドの古典言語であるサンスクリット語である。つまり、私は前近代の文学を読むことに時間を費やしており、それが将来を正確に予測するのに最適な場所でないことは言うまでもない。にもかかわらず、古代インドの文明が最先端の技術、未来の技術をいくつか所有していたと広く信じられていると言ったら、読者は驚かれるだろう。より古く、より良質なサンスクリット語のテキストに関する研究が、「正しい」方法で行われれば、これらの技術を次世代のために明らかにすることも可能かも知れない。具体的には、空飛ぶ円盤、大量破壊兵器、クローン兵器などがよく挙げられる例である。

しかし、こと教授法に関しては、古代の記録は信じられないほど進歩的とは言えない。ヒンドウー

教の神々でさえ、保守的な「前線の教え」に従うこととされており、生徒には出席と膨大な暗記が求められた。こうして、医学はブラフマー神からブラジャーパティ神に、そしていくつかの仲介ステップを経て、最終的に最初の人間の医師団を指導した半神の賢者に伝授された。この医師団は最初の医学大要を作成したが、これは他の人間が研究するには長大すぎたため、次代に受け継がれたのはほんの要約に過ぎなかった。また別の機会には、ブリハスパティ神がインドラ神に文法を説明しようとしたが、神の年で千年 (人間界の年で約36万年) 経っても終えられなかった。そのため、研究資料の体系化と一般的かつ特定の規則の策定が必要とされ、「人間の知性の最大の記念碑の1つ」とレナード・ブルームフィールドが語ったパーニニのア

シューターディーヤーイー (紀元前500年頃) がまとめられるに至った。

翻って今日、サンスクリットで博士号を取得し、インドラ神が数千年かけても習得できなかった専門知識を会得するには、5年で済む。これは知識の体系化が進んだ結果と思いたいところだが、伝統的な学者から見ると、それは計り知れない要約と学習水準の低下に過ぎない。私たちが衰退の時代、いわゆるカリユガを生きていることを考えれば、これは驚くことではない。カリユガは、宇宙全体の破壊 (そして復活) で終わるのである。現在であれ50年後であれ、この時代に正気を保つ唯一の方法は、神々の言語であるサンスクリット語を学ぶことかも知れない。

ところで近年、高齢者など研究とは無縁の人々

の間でサンスクリット学習が人気である。技術的な進歩 (とりわけ、さまざまなオンライン会議プラットフォーム) によって、大学がより一般の人々に開かれたということが一因と言えるだろう。しかし同時に、こうしたツールにより、サンスクリット語の遠隔教育を長年積極的に展開してきた小規模教育機関と大学が同じ市場で競争することにもなった。今後数十年は、教育機関としての大学が完全に時代遅れになるか、あるいは自ら再編成して生き残ることができるかどうかを決定するだろう。そして、生き残るとしたら、より広いグループの学習者に開かれることを選ぶのか、あるいは限られたエリート集団に専門的で質の高い教育を提供することに集中するのか。

生物学的グラデーションと社会的境界

竹沢泰子（文化人類学／人種・マイノリティ理論）

新型コロナウイルスが収束の気配をみせないなか、大手オンラインニュースなどで、「モンゴロイド人種である」日本人に感染者が少ないのは、モンゴロイド人種の遺伝的要因が関係しているからではないかといった議論が散見される。過去の感染症の歴史から、アジアの一部とヨーロッパの一部の間に、特定の遺伝子の分布頻度のちがいがみられたとしても不思議ではない。問題は、「モンゴロイド人種」、「コーカソイド人種」、「ネグロイド人種」といった、生物学的

境界の存在を前提とする捉え方である。

2018年版の『広辞苑』によると、「人種」とは、「人間の皮膚の色を始め頭髪・身長・頭の形・血液型などの形質的な特徴による区分単位」と定義されている。結論から言えば、これは時代遅れのまったく誤った説明である。そもそも、皮膚の色が濃くても、眼の色が青い人は珍しくないし、同じアフリカ人のなかには、世界一身長が高い集団といわれるディンカ人もいれば、ムブティ人やその近隣集団のように、世

界一身長が低いとされる人々もいる。

皮膚の色や体型のちがいは、人類の移動の歴史と環境への適応から生まれた。しかしそれはあくまでもひとつひとつの遺伝子の「分布」のグラデーション的なちがいに過ぎない。グラデーションのどこで区切るかは恣意的であり、人類に明らかな生物学的境界など存在しない。

他方、アメリカでは、黒人の新型コロナウイルス感染率が白人の2.4倍だという数字がある。この数字をいかに理解すればよいのか。まず、アメリカの「白人」「黒人」は、国勢調査等での「自己申請」に基づく社会的カテゴリーであって、生物学的根拠はない。次にこの数字は、遺伝的要素ではなく、人種差別によってもたらされ

たものであることが、遺伝学者らによって指摘されている。かつて住宅隔離政策によって、「特別警戒地域」として境界線で囲まれ指定された黒人貧困地域には、まともな病院やスーパーがなく、持病を抱える黒人が多い。こうした境界が生み出した差別が、新型コロナウイルス感染率やそれによる死亡率の違いを生み出している。

日本でもコロナ禍のもと、たとえば、「学生支援緊急給付金」対象から朝鮮大学校が除外された。生物学的「人種」は存在しないが、マイノリティに対する「線引き」が社会システムのなかでさまざまな格差やちがいを生み出す。しかしそのちがいは、同じ社会を生きるすべての人が引き受け、考えなければならぬ問題である。

グラデーション —— 離れれば現れ、近づけばほやける境界線の不思議

あらゆる境界は少し離れてマクロな目で見て初めて境界だと認識される。その境界に近づけば近づくほど、境目の存在は曖昧になり、ぼやけていく。そして我々は気づく。ああ、世界に境目など存在しない。すべてはグラデーションになっているのだ、と。

曖昧なところと境界線

畑中千紘（臨床心理学）

心理学の調査研究で、被験者をカテゴリー化する分析はやめた方がよいという指摘を受けたことがある。臨床を専門にしているなら尚、人のところはグラデーションになっているという発想を大事にした方がいいという他分野の研究者からの指摘であった。確かに、的を射たコメントだと感じる一方で、違和感もあった。臨床の仕事をしているからこそ、個人を既存の枠組みから捉える視点は重要と考えているからだ。たとえば、幻聴の症状をもつ人でも、ベースに「統合失調症」がある場合と「発達障害」がある場合では症候の理解と治療的ア

プローチが全く異なる。そのため、見立て・診断ができる＝境界線を正しく引けることは、最低限学ぶべき専門性として臨床心理学の訓練過程で重視されている。

一方で、調査研究は、こうした境界が曖昧になってきていることを示している。インクのみが何に見えるかを尋ねるロールシャッハテストで、発達障害のグループに特徴的にみられる「不確定反応」という反応がある。これは「なんかの動物」とか「イヌかネコ」といったような、未決定で曖昧な反応のことで、主体の弱さを反映するものだ。しかし、2003年と2013年

で同じ大学の一般学生にこの検査を行ったところ、2013年の学生に不確定反応が有意に増加していた（Hatanaka, 2015）。わずか10年の間に発達障害という概念の境界線が曖昧になっていることが示唆されたのである。ただし、発達障害の人では未知の対象に混乱した結果、不確定な反応になっているのに対し、大学生はあえて未決定な態度をとっている点が異なるのではあるが、少なくとも表面的な態度としては区別がつきにくくなってきている。実際、京都大学ころの未来研究センターの研究プロジェクトに訪れる発達障害の診断を受けた子どもたちの多くは、本当に診断され得るのかが微妙で、セラピーを受けてすぐに発達指数が伸びる子も多い。人を既存のカテゴリから見るとは本当に難しいことだ。

近年、社会全体が「わかりやすいもの」を求めている。"本当に便利な〇〇5選"、"誰でもわかるニュース解説"など、シンプルでわかりやすいことに価値がおかれている。病理や障害に関しても、はっきり診断してすぐに治してほしいという要請が高まっていることは多くの専門家が指摘するところだ。しかし、こころの臨床では専門家だからといって、簡単に理解できることはほとんどない。こころは変えようと思っても変わらないのに、思わぬところで大きく変化する、曖昧で多面的でつかみにくいものだ。そこになんとか境界線を見つけようとする作業は、こころの臨床にとってのせめてもの抛り所なのだ。

Hatanaka, C. (2015) "The Apparent Lack of Agency, Empathy, and Creativity among Japanese Youth: Interpretations from Project Test Responses" *Psychologia*, Vol. 58, No.4, 176-188.



いつかは人間に飛ぶことを教える者がくる。

そのときはすべての境界石がうごく。

かれによって、
すべての境界石は宙に浮き、
意味を失うだろう。

『ツァラトゥストラはこう言った』ニーチェ 著、氷上英廣 訳（岩波文庫）

Kyoto University
ACADEMIC GROOVE Vol. 2: BORDER — Humanities and Social Sciences

Writers

- 落合知帆(地球環境学堂 准教授)
久野愛(経済学研究科 講師)
Jeremy RAPPLEYE(教育学研究科 准教授)
福葉種(人文科学研究所 教授)
早瀬篤(文学研究科 准教授)
鈴木基史(法学研究科 教授)
村上由美子(総合博物館 准教授)
山本真也(高等研究院 准教授)
文世一(経済学研究科 教授)
西山慶彦(経済研究所 教授)
飯田玲子(アジア・アフリカ地域研究研究科 特定助教)
小倉紀蔵(人間・環境学研究科 教授)
町北朋洋(東南アジア地域研究研究所 准教授)
重田眞義(アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)
内田由紀子(こころの未来研究センター 教授)
稲谷龍彦(法学研究科 准教授)
米家泰作(文学研究科 准教授)
中溝和弥(アジア・アフリカ地域研究研究科 教授)
伊藤順二(人文科学研究所 准教授)
岩谷彩子(人間・環境学研究科 准教授)
出口康夫(文学研究科 教授)
瀬戸口明久(人文科学研究所 准教授)
児玉聡(文学研究科 准教授)
山本博之(東南アジア地域研究研究所 准教授)
石川登(東南アジア地域研究研究所 教授)
西平直(教育学研究科 教授)
野村理朗(教育学研究科 准教授)
中西竜也(人文科学研究所 准教授)
貴志俊彦(東南アジア地域研究研究所 教授)
坂出健(経済学研究科 准教授)
佐々木健(法学研究科 教授)
木下千花(人間・環境学研究科 教授)
Björn-Ole KAMM(文学研究科 講師)
西芳実(東南アジア地域研究研究所 准教授)
福垣恭子(教育学研究科 教授)
岡真理(人間・環境学研究科 教授)
伊勢田哲治(文学研究科 准教授)
LIU, Ting(経営管理研究部 講師)
高山敬太(教育学研究科 教授)
Andrey KLEBANOV(文学研究科 特定外国語担当講師)
竹沢泰子(人文科学研究所 教授)
畑中千紘(こころの未来研究センター 特定講師)